

神奈川大学言語研究センター叢書 第2巻

『都市空間の言語生態—上海の言語景観と道路命名の歴史』

彭国躍 著

くろしお出版 / 2023年3月発行 / 236頁

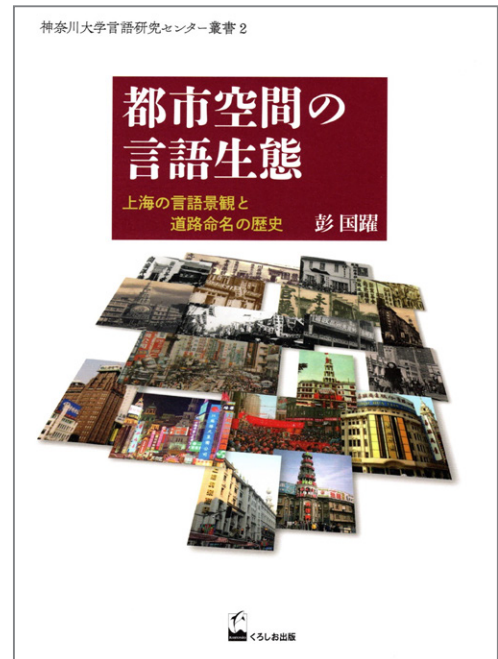
概要：

都市の言語景観は、街中の公共空間に現れる書記言語の一形態であり、その都市の言語生態の一部として社会的環境の変化、街の変貌と共に移り変わる。時代の異なる言語景観はいかに社会の変容を映し出していたのか、言語の多様性がどのような環境で生まれ、そしていかに消えていったのか、などの問題の究明は、歴史生態言語学や歴史社会言語学における重要な課題となる。

本書は、中国の近代都市—上海の公共空間に現れる書記言語の生態の歴史を探究するものであり、主に20世紀の間に上海の都市空間に表示された言語の種類、表現の内容や文字の形態などが社会的環境の中でどのように変容したのか、さまざまな環境因子がどのように言葉の変異や変化を引き起こしていたのか、などを明らかにすることを目的とする。本書の各章は筆者がここ数十年の間に、言語学、社会学、図像学、歴史学と人類生態学などの分野に跨るトランスディシプリナリー・アプローチを導入した研究の成果集成である。

本書全体の内容は第1部「上海言語景観史」と第2部「上海道路命名史」の二部構成となっている。

19世紀中頃以降、カメラの発明、改良と実用化により、人類の文明史上はじめて、消えるはずの歴史的現象・事実の一部がビジュアル情報として蓄積されるようになった。それにより映像分析



をベースとする新しい研究分野が次々と生まれた。言語景観史の研究はその中の1つである。第1部の「上海言語景観史」では、19世紀末頃からの百年間にわたって上海の街中に現れた書記言語（店頭看板、商業広告、政治スローガン、道路標識など）の実態を記述した上で、中国語、英語、日本語、ロシア語、ドイツ語を含む多言語使用の類型を抽出し、開港、移・植民、戦争、革命と改革などの社会的生態環境の要因がいかに都市の言語景観に影響を与えてきたかを、マクロ的全体像の展望とミクロ的ケーススタディという両方の視

点を導入しながら論じている。

都市の道路名は、そのほとんどが道路の標識として公共空間に表示されるので、言語景観とは切っても切れない関係にある。歴史上の道路標識の映像資料の収集には限界があるが、われわれは写真映像と文献記載の両方の資料を通して、道路命名の実態を記述し、その歴史的変遷をたどることが可能である。第2部の「上海道路命名史」では、19世紀の中頃から20世紀末頃までの150年間の路名変遷をたどるものである。20世紀中頃までの100年間では、近代上海の路名の形成と戦争との関わり、特にアヘン戦争、アロー戦争、中日戦争、内戦などの地政学的環境因子が英語、フランス語、日本語の路名誕生と頻繁な路名変更に与えた影響について、そして20世紀後半の50年間では、中国の国家制度が社会主義に変更した後の政治・経済政策やイデオロギーなどの社会的環境因子の変化が路名の変化に与えた影響について、それぞれ論じている。

従来の言語学研究において、話し言葉の研究では実際の言語活動を反映するものとして音声言語のデータを重要視する傾向がある一方、書き言葉の研究では紙媒体を中心とする文献言語にフォーカスをあてる傾向がある。本書はその両者の隙間にある領域、つまり日常の社会生活に密着する生きた言葉でありながら音声データによらないもの、そして書記言語でありながら街の公共空間に顕現されるものを扱う研究である。そして、本書では分析の範囲として、言語学関連では言語の種類、表現の意味、文字の形態（字体、書式、書体）、表音文字に反映された中国語方言の音韻情報、および言語政策などの諸側面を扱い、言語学以外では環境的影響要因として、国際関係、国内政治、社会体制、経済状況、市民生活、価値観、イデオロギーとアイデンティティなどの諸側面に及んでいる。本書の出版は、言語学を中心とする超学際

研究の可能性を探る1つのモデルケースを示すもので、社会言語学、都市の言語生態史、そして言語景観史の対照研究などに有益なデータや知見を提供することを目指すものである。

目次：

序

【第1部 上海言語景観史】

第1章 百年前頃の上海の景観言語と景観文字の記述

第2章 近代上海言語景観の生態言語学的類型—言語の選択、接触とアイデンティティ

第3章 上海「南京路」言語景観の百年の移り変わり

第4章 上海「大世界」言語景観の百年の移り変わり

【第2部 上海道路命名史】

第5章 近代上海の路名と戦争

第6章 現代上海の路名とイデオロギー

第7章 上海の道路命名年表—命名史論の基礎研究

あとがき